Violinと私

東京　山口光恒

昨年の東京海上フィルの演奏会で演奏する山口さん

今年の３月で19年間続けてきた大学教授を辞め、虎ノ門のシンクタンクに参与として勤務している。理事長は茅陽一氏で温暖化の分野では日本最高の研究機関である。毎日昼食後に茅氏との知的会話を楽しみつつ引き続き地球温暖化問題の研究を続けている。今回は研究とは全く無関係なViolinについて書く。Violinは子供の頃から断続的に習っていたが大学でオーケストラ（オケ）に入ってから俄然やる気が出、４年間は週３回のオケの練習、週１回のレッスン、気の合う友人との室内楽で過ごし、食事と通学、そしてたまの勉強以外のほとんどの時間をViolinを弾いて暮らした。週末は１日10時間以上は優に練習したものである。お陰で４年生の時にはコンサートマスターを務めさせて貰った。当時レッスンを受けていた曲はブラームスのViolin協奏曲などで今となっては良くこんなに難しい曲を弾けたと思う。

就職してすぐに会社のオケに入り少人数ながら未だ桐朋の学生だった秋山和慶氏（現日本指揮者協会会長）を指揮者に迎え細々と演奏活動を行っていたが、会社が猛烈化すると共に、文化活動は下火になり遂につぶれてしまった。

その頃大学オケの卒業生でOBオケを作る話が持ち上がり、私もその設立メンバーとしてこれに参加して10年ほど演奏活動をしていたが、カナダ転勤で中断、1984年に帰国以降も30年近く音楽とは無縁の生活を続けていた。ある日本誌に昔貨物で一緒だった黒田さんが東京海上のオケでベートーベンの第九を演奏するので合唱の参加者を募集していると書いているのを見つけ、この縁で本当に久しぶりでオケに参加することとなった。娘も合唱で参加したので生まれて初めて娘との共演が実現した。

東京海上フィルハーモニーの練習に参加してみると、昔会社のオケで一緒にやっていた越村さんがViolaで参加している。数年前までは村井さんも居られたようだが現時点では私がダントツの最高齢である。周りは若い女性が多く偶に意思疎通に困難を感じることはあるが、こちらが年をとったせいだろう。人数も100名くらいいる。会社に文化が戻ってきたようだ。驚いたのは弦も管も非常にうまい人が多く、しかもその大半が学生時代大学のオケで活躍していた人たちで、元コンマスも何人かいる。

私もオケを再開するからにはレッスン必須と言うことでこの２年ばかり読売日本交響楽団のViolinistに月に１回自宅で教わっている。音階練習を含めた教則本が３冊、それに曲（今はブラームスのソナタ）と４冊ある。これに加えてオケの曲もあるので入団以来極力７時前に帰宅し、そのまま９時まで練習を続けている。食事はその後である。家内のお陰でこれが可能なので内心感謝している。こうした次第でこの２年間は研究の時間が確実に毎日２時間以上減ってしまった。研究はまだできるがViolinは身体が動かないと弾けないので今はこちらに集中している。昔の腕には到底戻らないがおかげさまで少しは進歩してきた。

だんだん欲が出てきてオケの岡田さんの計らいで室内楽演奏会にもピアノトリオで参加し、他にも出番が増えてきた。昨年は茅陽一氏の叙勲パーティで１曲弾いたが会場が広く出席者多数であったため新日鐵の三村明夫氏には近くで聴いて頂いたが、遠くにいた東電の南直哉氏は私が演奏したことにも気づかないほどであった。

過去25年ほど毎年２回OECD会議に日本政府代表として出席のためパリに出張しているが、そこで最近良い弦楽器の店を見つけ毎回立ち寄っている。昨年暮れにはついに待望の鑑定書つきフランスの弓を手に入れた。1870年頃の作でフランスの弓の専門書に写真入りで紹介されている弓の現物だ。値段もかなり張ったがお陰で音色が良くなったので元は十分に取れている。反射神経や記憶力はかなり落ちておりあと何年弾けるか分からないが、論文執筆の傍ら来年２月の本番（ベートーベンの英雄など）に向けて更なる研鑽を積むつもりである。

親子共演、本番前のステージ練習で

みづたま会報　第 144 号　2015.6.1 p35-p37